

染物

衣食住に関連した染物の歴史は古く、静岡と同様に、清水江尻宿に「紺屋町」の名がありました。

江尻宿では、巴川の水運を利用して、藍染、型染洗い張りが行われていたと伝えられてきました。

その後清水港の発展とともに、印半纏（しるしばんてん）の需要が増えてきます。

冷凍マグロの水揚げ日本一の清水において、大漁祝いに船主らが、船子たちに印半纏を配る習慣がありました。この印半纏を万祝（まいわい）と言います。

南房総における万祝の風習と紺屋について、千葉県立安房博物館の手工業史から引用します。

マイワイは大漁祝いに網元や船主が、網子や船子たちに配った晴れ着です。そもそも、大漁時の祝宴をマンイワイといいまして、その引き出物として祝着の反物を送る風習がありました。そして次第にその祝着をマイワイと呼ぶようになったと言われています。

配られた反物は着物に仕立てられ、みんなお揃いで着て、神社仏閣にお詣りに行ったそうです。

マイワイは江戸時代後期に房総半島で生まれたと考えられており、青森県から静岡県にかけての太平洋沿岸地域に広がりました。呼び方もマイワイが一般的ですが、東北地方の一部では、長バンテン、大漁バンテン、カンバンとも呼ばれています。

大漁祝いにマイワイを配る風習は、明治から大正期をピークに昭和 40 年代まで続きました。その後はジャンパーや作業服等が配られるようになりました。

マイワイは、背と裾部分に背型、腰型と呼ばれる絵柄が描かれています。背型は、鶴の上に家紋や船印を描き、鶴がくわえる吹き流しに年代、漁場、船名などが記載されています。腰型は、鶴亀、松竹梅などの縁起のよい絵柄や波、千鳥、漁の様子、漁の対象魚を背景に扇、盃の中に漁の対象魚、船印、年代などの文字が描かれています。〈中略〉

房総地方では、一般的に紺屋は生活着からあつらえ品のマイワイまであらゆる品の製造販売を行う「よろず染物店」が普通でした。こうした「よろず染物店」においてもマイワイという一製品の需要が高まると、マイワイ中心の生産体制をとる店が現れるようになりました。しかし、その需要がなくなってくると、もとの「よろず染物店」に戻るか、廃業・商売替えをするようになりました。

第二次世界大戦後になると、この万祝を継承し、大漁の知らせを港で待つ人々にいち早く知らせるための目印として「大漁旗」を掲げるようになります。漁に出る者、陸で待つ者、双方の守り神の意味を併せ持っていたようです。ただ、今日のような図柄の入った大漁旗の歴史は意外と浅く、昭和 30 年代前半と言われています。清水港においても昭和 40 年代前半まで発展したようですが、漁船の材質が木材から鋼へ、また小型船から遠洋に出かける大型船への変換に伴って、次第に衰微していきました。

今日では、大漁旗本来の目的で使われることが少なくなり、数多くいた職人も減少しています。

最近では半纏とともに、祭礼時の半被（はっぴ）の製作やのぼり・旗などの製作も行っています。